

ンゴメリーの「カリフォルニアの夢」の重量盤では、発売がヴァーブではなくサンフランシスコのCISCOレーベルではあったが、左右ch反転定位となっていた。

また本作にはいろいろな逸話があり、当時ジョアンの妻であった若きアストラッドがたまたま歌ったところ、出来が良かったのでそのまま使ったという話が一般的だ。しかし、レコーディング時にアストラッドが「私にも歌わせて」と言い、ジョアンは下手だからと反対したという。そのときプロデューサーのクリード・テイラーが、面白いから歌わせてみようということになり、3trデッキの1trにアストラッドのヴォーカル入れ、後の編集でカット、オーバーダビングするということでジョアンを説得したのだという。それをジョアンに伝えたのが英語が話せたアントニオ・カルロス・ジョビンであったが、出来上がったレコードからアストラッドの歌は消えておらず、ジョアンが怒って2人はしばらく仲違い状態になったと、どこかのTVのドキュメンタリー番組のインタビューでクリード・テイラー(?)が語っているのを観た記憶がある。

しかし、アストラッドは「イパネマの娘」だけでなく「コルコヴァード」も歌っているし、彼女が英語が堪能かどうかは不明だがノーマン・キャンベルが書いた英

語詩で歌っているのも、このあたりの話は辣腕プロデューサー、クリード・テイラーが作りだした逸話ではないかと思う。

もともと所有していたのは1979年代後半に買い直したポリドールの国内盤だが、スクラッチノイズが少なく、ほとんど気にならない。若き日のアストラッド・ジルベルトのヴォーカルは瑞々しく、初々しさも感じられる。また、バランスが良く質感もナチュラルで、特に不満のないサウンドが聴けたのが嬉しい。ウッドベースは少し輪郭が甘い印象だが、スタン・ゲッツのテナーサクソともども適度にウォームなトーンが聴けるのが好ましい。

モービルフィデリティの重量盤は、さすがにオリジナルマスターからカッティングした新規制作だけに、国内盤に比べ明らかに鮮度が高い。またカッティングレベルも高く(とってリミッターなどを使っているような圧迫感はない)、スクラッチノイズは国内盤よりも一段と少なく、確実に高音質化され、テープ音源に近い安定感のあるサウンドが聴ける。アストラッドのヴォーカルはさらに瑞々しく、エコー成分もより透明度が高まり、ジョアン・ジルベルトの気だるい雰囲気のヴォーカルも、より正確に描きだされる。また、アコースティックギターの爪弾きのタッチやニュアンスもより